

保健体育科における教育実習のあり方に関する研究(Ⅱ)

—教育実習生の意識調査から見た課題の検討—

西村 清巳 松岡 重信 房前 浩二
岡本 昌規 三宅 幸信 高田 学峰
宇田 光代 三宅 理子 藤原 宏美

Ⅰ 本研究の目的

我が校では、毎年270人前後の教育実習生を受け入れ、未来を生きる子どもたちを育成することのできる教師を育てようとしている。しかしながら、以前のように「教師になろう」という強い意欲を持った実習生が減少してきたことに伴い、近年の実習生の実態にある種の物足りなさを感じるが多い。それは、他の何よりも、子どもたちにとって不幸なことであり、何とか打開しなければならないことである。そこで、未来の教師を目指す実習生のためにどのような教育実習を行うべきか、大学でどのようなことを学んでおけばよいのか、という点を明らかにすることを目的として、昨年度からアンケートによる学生の教育実習に対する意識調査を行って、教育実習のあり方を探っている。

保健体育科としては、教育実習生が授業を行う際には、その授業に対する個々の考えを十分に練り上げさせ、工夫したことや思いをどれだけまとめあげた指導案を作ることができるかということを大切にしてきた。なぜなら、子どもたちにその授業を通して何を考えさせ、何を習得させたいか、そのためにはどんな方法がベストか、さらには、それらを通してどんな子どもを育てたいかといった思いが良い授業を成立させるための基盤となると思うからである。その思いを具体的な形で授業の中に盛り込んでいくためには、指導案の段階で様々な角度からその方法や授業の流れなどを工夫することが大変重要であるし、その1時間1時間の積み重ねだけが子どもを育てていくことにつながるからである。つまり、plan. do. seeのplanがしっかりしているからこそ自信を持って生徒を動かすことができるし、その授業に対しての妥当な自己評価や、さらにそれらを次の授業展開に生かしていくことができるのである。そのため、2週間という短期間の教育実習の中では、一人5時間程度の授業を割り当てるのが妥当だと考え、指導案を十分に練って授業に臨むという

体制で実習を行うようにしてきた。しかし、近年、その指導案作成に自分の思いを十分に盛り込めず、時間に追われ、5時間の授業を自分なりの確かなねらいをもって行うことが難しい実習生が増えてきた。実習生の指導の方法を、根本から見直さなければならないときが来たのだろうか。他の教育実習校でも頭を悩ませていると聞く。

国家的規模で、教員養成のあり方を再検討しているが、これらの対策で、求められている教師の育成に功を奏するものも多くあろう。が、やはり、「それまで学んできたことを、教えるという立場に転換して生かす最初の場」である教育実習の持つ意味には、大きなものがあると言わざるを得ない。

今回の研究では、前年度に引き続き、教育実習の前後に行ったアンケート調査に反映された実習生の意識から、教育実習、さらには、教員養成のあり方を考えていきたい。

Ⅱ 研究方法

1) 調査対象

広島大学教育学部教科教育学科体育教育学専修
教育実習生50名(男子31名、女子19名)

2) 研究の手順

教育実習の前後に行ったアンケート調査に反映された実習生の意識から次の点を明らかにしたい。

- ①教員養成に関する大学の課題
- ②教育実習自体の課題(実習校の課題)
- ③実習生自身の課題
- ④教育実習が実習生に与えたもの

Ⅲ 結果と考察

1) 教員養成に関する大学の課題

資料.1に見られるように、教職に就くことを期待して入学した学生は5・4の段階の者をあわせて、33

人であったものが、教育実習直前の段階では28人になっている。また、1・2の段階の学生は、9人から15人へと変わっている。特に1の段階の学生が3人から9人に増えているのが特徴的であろう。この期待の変化の要因を、学生自身がもっている教育現場への思いや、大学のカリキュラム・教育学部についての思いを記述したものなどから探って見た。

まず、『学校現場に対する思いや認識』(資料.3参照)から、その変化の要因を探って見た。「教える側と教えられる側との間に溝ができ、難しくなっている」「教えることの難しさ・つらさ・責任」「授業以外にも多くの仕事がある」「荒れている」「学校の在り方自体が問われている」等の断片的な意見はあったものの、教育現場が抱えている課題を具体的に挙げている意見が非常に少なく、「ふれあい・人間関係を築くところ・青年期の発達段階に重要な役割をもっているところ・責任ある仕事場」というような、学校が本来持っている機能を単に並べ立てている意見がほとんどであった。

よく言えば、「健全な考え方で、学校というものに大きな希望を持っている」とも言えよう。が、自分が教育現場にどのように関わっていかうとしているのかという意見は、非常に少なく、「生徒一人ひとりの生き方、広い意味での進路に教師として関わっていく場であり、じぶんはそれをやりたい」「荒れた学校の原因を考え、対応策を考えたい」の二つのみであった。教師になりたいという希望は多くあるものの、非常に表面的なとらえかたに終わっていると云わざるを得ない。

また、大学のカリキュラムや教育学部に対しては(資料.2・6参照)、授業を行うためのマニュアル的な目先の方法を期待するものが多い。これは、従来大学が行ってきたやり方について行けない学生が増えていることを示しているとも言えよう。つまり、各講座において、指導者として将来授業を行う場合の基礎となる理論を学び実技を体験し、それらをベースとして自分自身で応用し、指導内容と方法を組み立てるといふ、学生の努力で対応していた構図が崩れ、何か具体的な指標がなければ不安を感じ、やっつけようになってしまう者が増加している現れであると考えられる。

大学が、教員免許証を取得すると卒業に必要な条件としなくなってから、選択履修の単位数が増加し、自ら求めて履修しなければ、例えばバレーボールの実技体験もないといった学生も出てくるようになっていた。そこで、アンケートの項目では、既設の開設講座の中で履修しておいた方がよいものはなかったのか、履修はしたが、もっと違った意識や観点でその講座を履修しておけばよかったと思うものはないかということ質問してみた。しかし、学生の反応としては、

「こういう講座があったほうが助かる」というニュアンスで、ハウツー的な内容のものを希望として多く出してきた。学生の能力、意識に低下が現れているとも言えよう。教員採用試験に向けても、対策的な指導を望む声が多く出ており、『そのようなことについては、学生が自らの意識と努力で取り組むもの』と、のんびり構えてはおれない現状があるとも言えよう。情けないような気もするが、学生の現状に対応した指導をする必要があると言える。保健体育科に限って言えば、実習直前に、実習校から指導案の書き方を含めて事前の指導を行うシステムを作り上げ、いくらかの効果を上げているとはいうものの、まだ十分とは言えない。実際に生徒の前に立って初めて、己の指導力や認識のなさに打ちひしがれ、そこから本当の取り組みが始まるのが常ではあろうが、もう少し時間をかけて、具体的なことについての事前指導がとれるだけのゆとりもほしい。学生の意見の中にも、「準備期間がもっとほしい」という意見が見られた。

これらのことは、本来は学生自身の課題であると思う。しかし、このようになってしまった責任は、学生自身だけにあるのではなく、それまでの生活歴の中で、そういった面を伸ばす環境に恵まれてこなかった部分が大きいことも否定できない。ともかく、学生の認識の実態がそうである以上、教師を目指す学生に対して、意識的な働きかけを大学のシステムとしても行い、埋もれている彼らの能力や認識する力などを引き出す具体的な対策が必要になってきていると思う。

2) 教育実習自体の課題(実習校の課題)

資料.1に見られるように、教育実習直前に教師になりたいと思っていた学生は、5・4の段階の者をあわせて見ると、28人であったものが、教育実習直後の段階では29人になっている。また、1・2の段階の学生は、15人から10人へと減少している。後期の実習の時期においては、すでに一般企業などへの就職が内定している者もいるが、それらの実習生の中でも、実習体験を通して、個々人の5段階評価が微妙に変化している。

これを見ていくと、『教師になりたいと思う気持ち強いままの者』が21人(5→5[16人]・4→4[5人])、『わずかでも教師になりたいと思うことを肯定的に思うようになった者』が12人(4→5[3人]・3→4[1人]・3→5[1人]・2→4[2人]・1→4[1人]・2→3[2人]・1→3[1人]・1→2[1人])、『教師への希望度が下がった者』が7人(5→3[1人]・4→3[3人]・3→2[1人]・2→1[2人])、『どちらとも思わない・なりたいたと思わないままの者』が10人(3→3[4人]・1→1[6人])であった。

教職を希望しない学生のアンケートに対する回答も、実習や学校現場に対して正面から向き合おうとしている様子が伺えた。実際、実習の場面でも、いい加減な態度で指導案を考えたり授業に臨んだりした者はいなかった。しかし、エネルギーの出し方とか、工夫をしようとするかどうかといったわずかな違いがある。食らい付きが弱いと言ってもいいであろう。無難には実習をこなし、学校現場への悪影響もなく、単位を修得するのであるが、過密なスケジュールや人数をさばきながら実習を行っている側としては、この問題はもっと積極的に検討する必要性を感じる。けれども、他の企業への就職が決まっても、自分自身を真摯に振り返り、今回の実習でつかんだことを自分の今後必死に生かそうとしている者も見受けられる。できれば、こういう人に教師になってほしいという、思い切ったものがある。教師への魅力、教師の醍醐味を味わわせるような大学生活（カリキュラムを含めて）や実習、さらには採用への展望が準備されなければならないと思う。

『期間・時期・授業時間数・グループの人数等』（資料.9参照）について見ると、現在の条件について、全体的に肯定的に捕らえているが、教師を希望する者の意見の中には、「もっとたくさん教えたい」、「授業時間数は適当だが、もっと指導案を練る時間がほしい」、「多くの種目を教えたい」、「もっと長くやりたい」、「一つの単元をやり切りたい」などの、積極的な意見が多かった。広島に付属においては、教科内での実習生の授業時間数の違いについて、負担感を感じたり不満を抱いたりしている者も多かったが、少しでも何かをつかもうとする積極的な学生は、やはり、もう少し実習時間数が多くてもよいと答える者がいた。前期の教育実習生は、「教員採用試験前でしんどいけれど、採用試験に役立った」と述べ、後期の教育実習生は、「ゆとりはあるが、実習で学んだことを採用試験に生かせない」と、対照的な意見を書いていた。「4年間の学問の成果を試すのがたった2週間でいいのか」という意見などと併せて考えると、教師を目指す学生にとっては、4年生の早い時期にもう少し時間をかけて実習を行うことが必要のように思われる。

『よかったこと・充実していたこと・大変だったこと』（資料.7参照）をみると、「施設・設備がよかった」といったハードの面での肯定的な答えが多かったが、内容に触れている意見もかなりあった。要約すると「自分のイメージと実際の現場は大きく違っていた」「だから、実際に生徒と向かい合って活動することができたことの意味は大きい」「生徒と向き合うことや教材研究・指導案づくりは大変であったが、充実感を

感じ、新しい自分を発見できた」という者が多いと言える。

教師を希望しない学生の意見の中に、母校実習の実施や期間の短縮を訴える者もいたが、「宿泊は大変だったが、皆で協力して考えることができた。」と、積極的な評価をする者の方が多かった。下宿から通えるという気軽さで広島を選んだ学生には、自分で考えることの大変さがあつたようであるが、合宿形式の福山での実習生は、仲間と一緒に考えられることの利点を最大限に生かしたようである。この辺りには、学生の本来の逞しさを感じることができる。

「指導法・指導技術」についてどのようにすべきかと悩んだ者が多かったが、それ以上に、「保健体育とは何か」、「自分は教師に向いているのか」等、生徒と向き合い、また自分と向き合い、指導することの難しさというものをひしひしと感じた者が多かった。それらを通じて、具体的に自分の思いを授業の中に生かすためには、「よく練られた指導案が必要である」、ということも初めて分かったようである。

3) 教育実習生自身の課題

『基礎能力の事前・事後の比較』の問題は、大学の課題とも関連する。(資料.5参照)「体育理論」については、事前に十分だと思っていた者は、4段階に7人、5段階は0人、事後ではやはり4段階のみが4人と非常に低い。もともと自信がなかつたうえに、実習で自分の今までの学び方がいかに不十分であったかを思い知つたようである。

「保健理論」、「指導技術」、「生徒の掌握能力」についても同じような傾向が見られる。「実技技能・運動技術の示範」については、かなり自信はあつたようであるが、実習を体験して見ると、やはり今一步十分でないと感じたようである。「生徒とのコミュニケーション」については、実習前後での意識の変化は余りない。1・2の段階(18人→19人)が、5・4の段階(13人→13人)より多いということを見ると、今後も高める方策をとる必要がある。「教育機器の使用」については、今回の実習で使用した者はほとんど無く、今後の経験に期待するしかない。

いずれにしても、十分な準備ができているとはいえない。学生自身の課題は、『大学のカリキュラム以外で何を学んでおけばよかったか』（資料.6参照）という問いに対して、「幅広い人間性や知識・能力を身につける必要がある」という意見に代表されるであろう。

残りの学生生活を、「自分をもっと磨く」「人間の幅を広げる」「今の生活や言動を見直す」「本をもっと読んだり豊富で多様な体験をしたい」「豊富な知識を得

たい」「魂を込めてやりたい」「中高の保健体育の内容を学びたい」「人間についてもっと考えたい」という意見はもっともなことである。

4) 教育実習が実習生に与えたもの

『考え方がどのように変わったか・教師として何が必要と思うようになったか・自分にとって教育実習はどんな意味があったか』(資料8参照)という問いに対しては、「教科指導は、単なる知識技能の伝達ではないということがよくわかり、良い教師を目指して人間性を高める事の必要性を感じるようになった。」「自分の甘さ、未熟さが分かった。もっと自分自身のいろんな力をつけて、社会人として成長していかなければならないということを感じた。」と答える内容が多かった。実習生自身の課題と相通ずるものがある。「教師もいいなあと思えるようになった」「教師は辛いこともあるが、楽しさややり甲斐があると思う」という、素朴な思いや、「今まで学んで来たことを『実践』した、ということが一番の体験である。」「教えるということの難しさを知り、人に教えるということを通して、自分自身を見つめ直すことができ、自分自身が何か変わったような気がする。」という意見が出てくることを考えると、教育実習の重要性を改めて感じる。実習が学生に与えたものは数多くあり、それまで蓄えてきたものを自分の形に加工して吐き出す初めての実践の場であると同時に、自分の人間性を反省する場でもある。

「教師になりたい」と思いながらも、「あんないい先輩が何年もトライして、まだ正式採用されないなんて・・・」という実態に出会うと、気持ちが萎えてしまい、別の職業を考えるという気持ちも分からないではない。しかし、希望があるのなら、やはり大学入学時から、自ら求めて「力をつける努力」を惜しまないでほしいと思う。

IV まとめと課題

冒頭でも挙げたように、現在、学生の教育実習で頭を悩ませている教育現場は多い。特に、一度に多くの教育実習生を引き受け、指導している附属校においては、深刻な問題であり、それぞれの学校でさまざまな対策がとられている。ある学校では、本当に教師になりたい者と、免許取得することだけを目的として実習に参加する者とは、実習の受け方に差があり過ぎることから、事前に一人ひとり丁寧に面接を行い、実習に対する熱意の違いによって、授業時数や評価にも違いが出ることを納得させたくうえで実習を行っている。また、ある学校では、少ない時間数では子どもを動かすことができないので、実習期間中に一人20時間も

の多くの授業を経験させ、授業中であっても指導教諭が常にそばにいて、学生に指導を加えるという方式をとっている。また、別の学校では、実習期間中に学生が保健の指導案を書く余裕もないし、指導する時間もないということから、保健の指導は実習が始まる2～3ヶ月前から行っている。さらには、専門種目以外の運動経験がないという学生に対して、生徒にけがをさせなければいいというレベルで授業を行わせざるを得ないという学校や、実習期間を3週間にしている学校があるなど、独自のやり方で、学生の実習状況に対応している。

我が校の今回の実習でも、教職に就くことを希望して大学に入ったものは50人中33人であるが、これを多いととらえるか少ないととらえるかはさておき、この33人のうち実習直前においてなお教師を目指しているものは、27人へと減少している。大学生活で他にやりたいことを見つけた者、教員の採用が極めて少なく他の職業を考えざるを得ない者、最近の子どもの状況から教師という職業の大変さを考える者など、いろいろな要因はあると思うが、共通して考えられるのは、「学生が自らの意識と力と努力で取り組むもの」という状況が崩れ、意欲的に実習を受ける学生が少なくなってきたことにあると思う。学生の教育学部に対する不満という項目での回答を見ると、現場で役立つ実践的な講義や教員採用試験対策などの要望が多く、大学のカリキュラムや、講義内容などの見直しによってある程度対応できる部分はあるのではないかともいえる。しかしながら、実技の授業などでは幅広く選択できるシステムがあるにもかかわらず、それを積極的に利用していないものが多く、このような修学姿勢であるかぎり、将来教師として、教科教育のプロとして、幅広い知識・豊かな経験のもとで生徒を指導できるようにするには程遠い。

教員養成のシステムを国家規模で見直すことを目的として、教職員養成審議会答申では、使命感、得意分野、個性を持ち、現場の課題に適切に対応できる力量ある教員を養成するために、職員養成カリキュラムの改善について、教育職員免許法改正案を打ち出している。具体的には、小学校・中学校の教員養成を中心に、教育実習の期間の延長や教員志願者に対する介護体験等の円滑な実施、教員研修におけるボランティア活動や福祉活動等の体験活動を推進するなど、すぐにも動き始めるものもある。また、教員資質の高度化として、教員の実践的指導力を抜本的に高める観点から、大学院修士課程を積極的に活用した教員養成のあり方などが再検討されたり、現役教師の大学での再教育の機会を増やすなどの工夫もある。

これはこれで効果を上げることが考えられるものの、大学生活の集大成となる教育実習が有効に行われてこそ、相乗効果を発揮するものとする。

今回の調査の『今、教師になりたいと思うか』の質問項目で、実習前は1・2と答えていたが実習後にはそれぞれ4と答えている学生が2名いた。この学生のアンケートを追っていくと、「教育実習では、教材研究などが大変であったが、毎日朝早くから夜遅くまで授業について考え、指導案を練り上げて授業を行う中で、教える立場としての良い緊張感を味わい、教師という立場を考え直した2週間だった。そして、何より

も生徒が授業の中で変わっていく姿を見るのが、とてもうれしかった。教師としてまだ不十分だと思うが、生徒の心をキャッチできるようになるために、残りの大学生活は、今しかできないことを積極的にやっていきたい。」と回答している。このような事から考えると、教職に就こうとして実習を受けるのかどうかに関わらず、学生にとっての教育実習の意味は大きいといえる。

教育実習によって一人でも教職についての意識が変わり、求められるパワフルな教師が育つよう、今後も実習校として検討していきたい。

V. アンケート結果

資料1

①教職に就くことを期待して、大学に入学しましたか？							②実習をこれから行う今、教師になりたいと思っていますか？						
した	5	4	3	2	1	しない	思う	5	4	3	2	1	思わない
人数	21	12	8	6	3	人数	人数	17	11	7	6	9	人数
③実習を終えた今、教師になりたいと思っていますか？													
思う	5	4	3	2	1	思わない							
人数	20	9	11	2	8	人数							

<実習前>

資料2

I. 大学に期待したもの							②今の教育学部に満足していますか？												
①教職に就くことを期待して、大学に入学しましたか？							十分							5	4	3	2	1	不十分
した	5	4	3	2	1	しない	人数	3	16	21	9	1	人数						
人数	21	12	8	6	3	人数													
③どんな点について満足していますか？																			
<ul style="list-style-type: none"> 教育、学校の現場について、知ることが出来る 教職教養を幅広く学べる 勉強しようと思えばいくらでもできる 教職についての情報等、教育者を育てる環境が整っている 分野別に教官がいる。要するに幅広い 体育の実技は常に教師になった時を意識して受けることが出来る点 先生や先輩、後輩とのコミュニケーションが上手くとれているので相談しやすい 様々な分野で活躍されている先生が沢山いる。先生方に恵まれている 図書館、食堂などの施設の内容が豊富で緑がたくさんあり、他の大学と比べると美しい 自由な時間が多く、自分の好きなこと、したいことが出来る いろいろな資格を取ることが出来る可能性を与えてくれているので満足している 							<ul style="list-style-type: none"> 実技の授業が多く、幅広い種目選択ができる 広大の教育学部は有名である 自主性を非常に大事にしている 4年時に授業が少ないので就職活動などに時間が利用できる 就職について先生方も協力してくれる 												
④どんな点が不満ですか？																			
<ul style="list-style-type: none"> 教職に必要な科目はあるものの、現場で役に立つような科目が実習の2週間しかない 講義を受けても教師として授業が出来るだけの能力が養われない 教師になりたい人にとっては、講義が少ない 教授陣が教育者としてよりも研究者として存在している点 もっと教育現場の実態を詳しく知りたい 生徒指導についての授業がもう少しあってもいい 教育実習が母校でない 一般就職や公務員の情報が圧倒的に少ない 教採についての授業があるとよい 教採対策が少なく、情報が伝わりにくい 一般社会とか離れた環境で現実の厳しさがわかっていない非常識な人間を育てている 							<ul style="list-style-type: none"> スポーツ科学の分野における器具施設が不十分 出席さえすれば単位が出るという授業 小学校の免許がとりにくい 保健体育として実用的な専門の授業内容が少ない 指導案の授業があればいい 多人数での授業が多すぎる カリキュラム自体がどうなのか 就職が難しい 												

資料3

⑤教育現場(学校)について、どんな思いがありますか？													
<ul style="list-style-type: none"> とても重要な責任の重い難しい仕事 忙しいそうだが生徒とのふれあいがある。充実している 							<ul style="list-style-type: none"> 生徒の数が多すぎて、目が届かないところ 勉強だけでなく、社会のルールやマナーを学習させる場 						

- ・生徒一人ひとりのこれからの生き方、いい意味での進路に大きな影響を教師として与えることができる。人生でかなり重要な場であると思うのでとても大事である。自分もそういう人になりたい
- ・一生の友達を作れる場所。勉強をして知識を得る楽しさも知ったが、それよりも友達の大切さを知った
- ・教師と生徒の連帯の場・集団生活
 - ・大きな制度によって自由が利かない
- ・社会生活のための準備期間、知識・技能の獲得
 - ・時代、地域などによって生徒の姿が違うので楽しみ
- ・最近やっと生徒の個性や自主性が強調され、よいことだと思う
- ・楽しかったけどつらかった
 - ・世間から隔離されたところ
- ・塾の存在の陰になってしまったような感じもするが、人間と人間の関係にある大事なことを身をもって学ぶためにも必要である
- ・子どもの成長にはかせないところ。特に青年期の発達段階においては重要な役割を持っていると思う
- ・決していい面だけではない。嫌な面、汚い面などたくさんあるけど、教育を受けるために自分を知るために行く
- ・マスコミの報道が相次ぎ、学校は荒れていると言われるが、原因や対応策を考えたい
- ・多くの人との出会い、友情、厳しさ、苦しさを共に乗り越えた時の感動
- ・現在の教育は複雑になっている。教える側も教わる側も学校に対して期待する部分や持っているイメージがだんだん変わってきて両者に溝がでていくような気がする
- ・生徒と教師の間でのコミュニケーションが近年特に難しくなってきたと思う
- ・生徒は生ものであるので難しい。授業以外にも多くの仕事を抱えている
- ・教科ごとの教師の連携が強い。いろいろな意味でシステムの
- ・挨拶できる、思いやりのある、社会のルールが守れる生徒を育てる

資料4

Ⅳ. 教育実習自体について

①教育実習で何を学びたいですか？

- ・授業の流れ
 - ・時間配分
- ・楽しくわかりやすい授業の進め方
 - ・実技の指導方法
 - ・指導案のたて方、生徒に対する指導方法
- ・生徒の体育保健に対する取り組みを観察し、体育離れに対する対策
- ・教育目標に対してどのような内容を行えば生徒によりよく理解してもらえるのか
 - ・生徒と同じ目線で見るということ
- ・自分の可能性・生徒を引きつける方法
 - ・人前に出ても堂々と意見が言える
- ・能力に応じた指導方法
- ・自分の能力を高めたい(人間的にも、教育者としても)
- ・現在の教育現場の状況から今後の教育がどう変化しているか
- ・教育現場の雰囲気を感じ取りたい
 - ・生徒の心を知りたい
 - ・教育現場での教師の取り組み
- ・教えることへの責任、重要性
 - ・人に何かを教える楽しさ、嬉しさ
- ・今の子どもたちの学習に対する姿
 - ・授業を受け持つ責任感
 - ・生徒の心を知りたい
- ・マスコミに言われているような現実があるのか
- ・授業中の発問に対する生徒の反応
 - ・失敗をおそれない気持ち
 - ・生徒が教師に求めているもの
- ・生徒が今何を考え、何に興味を持ち、どんなことをしているか
 - ・話題の振り方、授業内容との関連づけ
 - ・教壇に立つための実践的な能力
 - ・教師としての自覚
- ・自分の指導力はどれくらいか
 - ・自分の苦手な教科の指導の仕方
- ・指導することのおもしろさ
 - ・教材研究や指導案の作成の仕方など授業が成立するまでの過程について、また実際に生徒とのコミュニケーションを通して現在の生徒のおかれている状況や心理的状况について触れてみたい
- ・指導を行うときの心構え、注意点など
- ・教授方法や情報収集能力を付けたい
- ・社会人になる前に自分が足りないものの発見
 - ・自分の苦手な教科の指導の仕方
- ・年齢にあった指導法
 - ・自分の苦手な教科の指導の仕方
- ・教材研究や指導案の作成の仕方など授業が成立するまでの過程について、また実際に生徒とのコミュニケーションを通して現在の生徒のおかれている状況や心理的状况について触れてみたい

②教育実習に何を期待していますか？

- ・新たな自分の発見
 - ・現場の教師から経験をふまえたアドバイス
- ・教師の立場から見た学校の捉え方
 - ・教師に必要な資質を身につけたい
- ・現在の力がどれだけ不足しているかを知る
 - ・この経験が人生において役立つこと
- ・生徒とのコミュニケーション
 - ・実際の生徒指導・教科指導を確認する
- ・自分自身のグレードアップ
 - ・教育の場の雰囲気を体で慣れる
- ・教師に適しているか知りたい
 - ・教える立場と教えられる立場の意識の違いなど
- ・教師として生徒を指導していく自信を持つ
 - ・世の中の厳しさを身をもって学習させてほしい
- ・生徒を引きつけるような授業の手がかり
 - ・保健体育の準備・指導、次への応用能力の向上
- ・自分の将来の可能性
 - ・教員になりたいという気持ちになれること
- ・懸命になって創り上げた授業を成功させたときの喜びから一人の大人としての自信をつけること
- ・失敗することで今後の成功を期待する
 - ・社会人としての心構えをつけたい
- ・一人の教育者として、生徒と一緒に成長できること
 - ・自分が今持てる力でどの程度までできるか楽しみである
- ・指導案がかけられるようになること
 - ・生徒と同じ目線で見るということ
- ・生徒の気持ちを少しでも感じる
 - ・授業を終えた後の満足感
- ・教師がどのような職業なのか、おぼろげにでも知ることができたらいいと思う

③不安なことがありますか？

- ・生徒とのコミュニケーション
 - ・人に教えると言うこと
- ・すべてが不安。失敗することが怖い
 - ・自分の健康状態、体力、睡眠時間
- ・実技の示範(技術がない)
 - ・生徒が授業に楽しく取り組んでくれるか

- ・生徒を把握しないまま授業をすること
- ・授業が効率よく進むかどうか
- ・授業時数が多く、詰まっているのでこなせるか心配
- ・授業が指導案通りにならなかったり、パニックになったりしないか
- ・準備期間が短い。何も知らない科目を教えることになり、成功するかとても不安である
- ・生徒から学ぶことはあっても生徒に何か与えられるか
- ・みんなが引きつけられるような授業をするにはどんな方法を使えばよいかなど
- ・生徒の視点で物事をとらえられるか
- ・保健の授業は実技と違い緊張するのではないか
- ・授業を最後まで管理できそうにない
- ・授業の仕方・指導案の書き方がわからない
- ・おもしろい授業、生徒の中に何か一つでも残すことができるか
- ・見た目の印象がよくないので先入観を持ってみられることが不安
- ・生徒が理解出来る授業が出来るか
- ・計画を立て、行動に移せるかどうか
- ・自分にはできて生徒にできない技術をどう教えるか
- ・体操が苦手なので、ちゃんと教えられるかどうか
- ・自分の知識などすべて
- ・生徒の反応（期待通りのリアクションがあるか）
- ・目標とやることが一致できるか
- ・教師の道が厳しくなっていること

資料 5

Ⅱ. 教師のための基礎能力に関して

①教育実習を受けるに当たり、次の項目について準備は十分ですか？

－実習前－

ア 体育理論

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	7	15	20	7	人数

イ 保健理論

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	4	17	23	6	人数

ウ 実技技能

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	3	22	15	9	1	人数

エ 指導技術

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	4	16	24	6	人数

オ 生徒とのコミュニケーション能力

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	2	11	19	13	5	人数

カ 生徒の掌握能力

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	4	15	22	9	人数

キ 運動技術の師範

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	1	17	17	14	1	人数

ク 教育機器の使用

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	8	16	20	6	人数

ケ その他に、必要と思われる能力や、自分で準備したのがありますか？

- ・観察能力
- ・笑顔
- ・気持ち
- ・明るさと元気
- ・自分が教える単元の資料
- ・緊張せず、リラックスして授業を行う
- ・生徒の授業を預かるという自覚
- ・ユーモアのセンス

－実習後－

ア 体育理論

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	4	11	21	14	人数

イ 保健理論

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	6	6	20	18	人数

ウ 実技技能

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	3	12	23	10	2	人数

エ 指導技術

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	1	1	15	19	14	人数

オ 生徒とのコミュニケーション能力

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	1	12	18	14	5	人数

カ 生徒の掌握能力

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	2	16	23	9	人数

キ 運動技術の師範

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	2	10	22	13	3	人数

ク 教育機器の使用

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	11	21	15	3	人数

<実習後>

資料 6

②大学のカリキュラムで、今までにどんなことを学んでおけば良かったと思いますか？

(どんな講義、演習、などがあれば良かったと思いますか？)

- ・授業趣旨論や実習などのもの
- ・授業の構成の仕方
- ・教材を授業においてどのような順で展開していけるか
- ・教員志望なので、直接的に授業につながる
- ・実際に実技の指導を行う演習など
- ・数多くの運動実技科目を受講しておけば良かった
- ・体操(嫌だったからやらなかった)
- ・幅広い運動技術・方法の知識
- ・集団に対する指導技術、集団の動かし方
- ・保健理論に関しての講義、保健の進め方
- ・道徳教育原論・教育原論など
- ・子どもとのコミュニケーションに関するもの
- ・演技力をつける講義
- ・指導方法(具体的な言葉・立つ位置・進め方など)
- ・それぞれの動作の教えるポイントをもっと知っておくべき
- ・実技技能を高めるだけでなく、指導技術も高まる講義
- ・時間が限られた中で自分の言いたいことを言う能力
- ・模擬授業
- ・現在の中高生の現状
- ・板書の書き方
- ・生徒の気持ちを把握すること
- ・生徒に聞かせるための話術

③大学のカリキュラム以外に、自分で何を身につけておけば良かったと思いますか？

- ・自己表現力(話、表現、意見など)
- ・人を動かす技術

- ・人の命の尊さを実感していたつもりだったが細かい配慮が足りていなかった
- ・伝えたいことを自分の言葉で的確にスムーズに言える力
- ・コミュニケーション能力
- ・人前で話すこと
- ・図話能力
- ・日常生活の観察力
- ・体育・保健など、教科書にのっていない互知識や雑学をたくさん知ること
- ・競技に関する知識・技能
- ・教養
- ・演技力
- ・体育理論・保健理論の基礎知識とそれに関する記事など
- ・全体を見回す視野。冷静さ
- ・板書の字のきれいさ（はやさ）
- ・臨機応変に動ける力
- ・スポーツ指導の資格
- ・演技力

資料7

II. 教育実習自体について

①どんなことが大変でしたか？

- ・教材研究。授業で伝えられるのは氷山の一角、見えない氷の部分がとても大事、教材研究を時間的に制約された中で行うこと
- ・指導案の作り方
- ・50分という授業内でどのように授業を展開していくか
- ・前時とのつながりや、中心のポイントを考慮すること
- ・どうやって興味のある授業にしていくか
- ・生徒が興味を持ってくれるような授業の内容を考えること
- ・雨用の指導案作成
- ・個人差・男女差・命の重さについて気を配ること
- ・個に応じた課題設定、個人指導
- ・指導案上での時間配分通りに授業が進まない点。生徒がどれだけ働かか計算できない
- ・生徒とのコミュニケーション
- ・生徒の予想外の反応を受け止め、対処すること
- ・自分が生徒にやってほしい、わかってほしいと思うことを言葉で伝えること
- ・生徒全員を自分に注目させ、生徒全員に目を向けること
- ・生徒の名前がわからなかったこと
- ・生徒がどれだけ理解しているか把握すること
- ・生徒の自由奔放さに手をやいた
- ・自分の中の教育指導の形と、実際の指導現場の違いにショックを受けた
- ・仮面をかぶって授業をすること
- ・字のうまさ
- ・就職活動
- ・睡眠不足になること

②教育実習で良かったこと、充実していたことは何ですか？

- ・授業観察などで中学生・高校生の心理的な状況、雰囲気を感じられたこと
- ・生徒たちとうまくコミュニケーションがとれたこと
- ・生徒がうれしかったこと
- ・生徒が出来た喜びを生徒とともに味わったこと
- ・生徒に励まされたこと
- ・授業の流れにつながりを作ること
- ・授業の大変さが身にしみて分かったこと
- ・向上心が生まれ、失敗を素直に受け入れるようになった
- ・人を動かす難しさに気づき、改善しようとしたこと
- ・授業におけるいろんな視点が分かった
- ・授業に必要なものは何か少しづつわかった
- ・指導案にかけた時間は、すべて自分のためになっていると実感したこと
- ・新しい知識を得ることができた
- ・やったことのない実技を経験できたこと
- ・教える立場としてのよい緊張感が生活に充実感を与えた
- ・教官とのコミュニケーション
- ・生徒を大切に思う先生方の熱心さを感じる事が出来た
- ・先生が遅くまでつき合ってくれたこと
- ・実習生が協力し合ったこと
- ・他の実習生の授業内容についても一緒に考える機会があった
- ・同じ学科の人がどうしているか知り合えた
- ・規則正しい生活が送れたこと

③教育実習を通して、何を考えましたか？

- ・授業内容の構成の仕方と展開の仕方
- ・いかに楽しく活動させるか、どう興味を持たせるかなど
- ・教育とは何か、「教育」を通して何を伝えるか
- ・改めて「保健体育」とは何であるかを考えさせられた
- ・保健という教科の重み
- ・指導することの難しさ
- ・どうやったら、自分の言いたいことを生徒全員にうまく伝えられるのか
- ・生徒を引きつけ、ひっぱっていく力を付けたい
- ・自分自身を見つめなおした
- ・自分は教師になるべきか？教師になる人材なのか？
- ・自分に合っているのは、中学か高校か
- ・日々、大学にいる時、自分は何をしているのか
- ・教師という職業について
- ・生徒にしてやれることは何か
- ・苦勞、大変さ
- ・得るものが大きい職業
- ・生徒が理解してくれたときのうれしさは支えになる
- ・人生勉強はつづくものだ
- ・生徒一人一人を大切に扱うことの難しさ
- ・生徒一人一人の考え方、感じ方の差
- ・附属と他の学校の生徒の違いはどうか
- ・人間関係について
- ・勉強不足ですみません（指導してくださった先生方、生徒へ）

資料8

④実習を終えた今、実習前の考え方と変わったことはどのようなものですか？

- ・保健という教科の意味と重み
- ・授業は予想以上に難しい
- ・相当な教材研究が必要だと実感した
- ・授業はとて奥深く、本当に戦いだと思った。50分って短い
- ・生徒全員を動かすのはけっこう大変だ
- ・情熱だけでは授業はできない
- ・授業の一つ一つは、生徒に知識を教えるだけでなく、いろんな事を伝えていく場ではなくてはならない
- ・体育は、技能を教えるだけでなく、準備等を通して、社会性を養うことも大切
- ・理論に合い、なぜやるのか目標のある授業をしなければならない
- ・一つ工夫があるだけですごく授業のムードをかえる事ができるとわかった
- ・計画に沿いながらも生徒の反応・動きを見て指導内容の変更なども必要

- ・教育に完成形はない
- ・自分の気持ちを伝えることは難しい
- ・他人との違いを気にする生徒への接し方、またそういう人がいることを改めて感じた
- ・生徒は教師をよく見ている
- ・生徒の視点で物事を考えること
- ・日常生活の中で学習することは限りなくある。大学を出たら社会人として一人前だと思っていたが、それはとんでもない思い上がりだとわかり、自分はもっと謙虚にいろいろと考え始めた
- ・教員としてのイメージが具体化した
- ・つらいことばかりではなく、楽しさもあり、やりがいもある
- ・どのような人間になってほしいかを全面に出して行動することが必要
- ・先生になる人の気持ちが分かった
- ・考えていたよりも生徒の能力は高くはないし、しかも生徒間での差が大きいということ
- ・もう少し生徒と接していたいという心残りもある
- ・生徒とのコミュニケーションが一番重要
- ・年齢に対応した接し方について
- ・生徒に話しかけるようになった。明るくなった
- ・教師に対する考えが甘かった
- ・教師になるという意欲がより深まった。自信がもてた
- ・教師という職業の良さ

⑥教師として活躍するためには、何が必要だと思いましたか？

- ・教材に対する深い知識とそれを生徒の能力に合わせて展開していく力
- ・生徒を自主的に動かすようもっていく指導力
- ・雰囲気作り、ユーモアのセンス
- ・生徒をしっかりとらえられるコミュニケーション能力
- ・授業以外でも生徒を把握し、指導できる知識と技術
- ・教育すること、指導することの難しさ、大切さ、重要さを知ること
- ・人の流れに流されない力
- ・創意工夫、柔軟な思考
- ・熱意 情熱、やる気、愛情、思いやり
- ・努力と根性、忍耐力（授業を始める前の過程はすごく根性がいった）
- ・広い視野、全体を見る目、観察力、個人を分析する力
- ・気持ちを盛り上げる能力、声の大きさと明るさ
- ・どのような人間になってほしいかという自分の考え方
- ・自分が生徒よりも一生懸命授業に取り組むこと
- ・生徒の立場で考え、生徒に信頼してもらうこと
- ・実行力、臨機応変に動ける力、判断力
- ・うまく話す術
- ・度胸、経験
- ・実技能力
- ・健康、笑顔、おちつき、
- ・うつつの大きさ

⑦教育実習は、あなたにとってどんな意味のあるものでしたか？

- ・教育とはどんなものであるかという疑問を投げかけてくれた
- ・自分を見つめ直させてくれた
- ・自分がまだまだ未熟者で、今まで受け身な生活をしていたことに気づかされた
- ・これからの人生に影響を与えていくものだと思う
- ・知らなかったものを知り、こうだろうと思っていたことが違った
- ・教採の試験勉強だけではダメ
- ・追求していくことの楽しさと大変さを知った
- ・「自分の考えを持つ」ということを知ることが出来た
- ・意識高揚になった
- ・教師という仕事の大変さ、奥深さ、すばらしさを知るためのもの
- ・現場に出たときのための精神安定剤のようなもの。この緊張は忘れないと思う
- ・生徒ができなかったことが数時間で出来るようになったり、それで喜んでいるとこちらまでうれしくなった
- ・教師という立場を考え直した2週間だった
- ・やりがいはあるが、家庭をもってからも続けていけるか、考えさせられた
- ・人前で話すことなど、これからの社会に生かせるもので自信につながった
- ・いつも前に進もうとせず、立ち止まって考え、生徒に配慮してあげることの必要性の認識
- ・教師になるという意欲がより深まった。自信がもてた
- ・人を動かす能力のなさを痛感
- ・貴重な体験
- ・精神的にも経験においても少しだけ成長した
- ・悩んでいたものを解決してくれた
- ・教師を目指す意欲がさらにわいた

資料9

⑧実習期間、時期、授業数、内容、グループの人数等について何かありますか？

- ・授業数は週2回程度が適切
- ・一つの単元をやりきってみたい
- ・授業と授業の間がもう少しあれば、ゆとりをもって準備、勉強ができたと思う
- ・授業数は多くしんどかったけど、それは自分の準備不足、力不足だと思う
- ・自分の経験不足、知識不足ということもあって難しかった
- ・担当授業数にかなりの差があるのに同じ評価というのはどうかと思う
- ・同一クラスを通して指導していけば、指導の成果や生徒たちの成長も比較しやすいと思った
- ・担当の先生のクラスにもっと接したい。(SHRとか)
- ・時期が教採前なのできつい
- ・期間が長い→就職希望・附属でない方がいいことは確か
- ・授業をもっとやりたい
- ・実習期間をもう少し長くした方がいい
- ・母校実習を許可してほしい(環境面・金銭面から)
- ・他の学校へもいつてみたい
- ・時期をずらしてほしい←就職希望
- ・授業数を均等にして欲しい(学科間含む)

資料10

Ⅲ. 残りの大学生活をどのように過ごしたいと思っていますか？

- ・教育実習で得たものを生かす
- ・中・高の保体の授業にある内容を勉強したい(実技も)
- ・全体を見られるようにしたい
- ・教師としての能力を向上させたい
- ・人にわかりやすく説明できるように心がけたい
- ・人間関係を大切にし、他者を寛大に受け入れる
- ・子どもの気持ちについて考えたい
- ・現在の行動・言動を考え、自分勝手な行動や言動は控えたい

- ・教員採用試験に合格出来るよう頑張る
- ・社会での役に立つ知識を学びとりたい
- ・部活動を頑張る
- ・自らを磨きたい
- ・やるべきことを魂を込めてやる
- ・大学時代にしかできないことを、残りの貴重な時間でしていきたい
- ・知識を深め、いろんなことを経験する
- ・自分がやりたいことを見つけたい
- ・いろんなスポーツをし、幅広い運動知識を得たい
- ・一日一日を大切に作る
- ・夢に向かってがんばります

資料 1 1

IV. 教職に就くことについて

① 今、教師になりたいと思っていますか？

思う	5	4	3	2	1	思わない
人数	20	9	11	2	8	人数

② それは、なぜですか？

- 5 -
 - ・自分の選んできた道でここまで来たら、教師以外の選択肢は考えられない
 - ・天職だから
 - ・うまくできなかったが、できたときはきつとすごくうれいだろうと感じたし、生徒と触れあうことがとても楽しかった
 - ・生徒が何か少しでも上達したときのうれいそうな顔が良かった
 - ・目標、夢だから
 - ・「保健体育」を通して、生徒に考えることをしてほしい。(協調性・自主性)
- 4 -
 - ・小さいころからの夢である
 - ・教師になることで人に何かを伝えるということを実践で身につけていきたいと思ったから
 - ・やりがいがある
 - ・まだ不十分。生徒の心をキャッチできるようにになりたい
 - ・教師になりたい気持ちもあるがもうすぐ就職の結果が送られてくることもあり、5にしたいところだが
- 3 -
 - ・とても難しいと感じた
 - ・教師も常に学んでいかなければならない。大変な仕事で魅力(やりがい)がとももある
 - ・生徒に指導するのがおもしろいし、生徒と話すのが楽しかったから
 - ・真面目な生徒ばかりじゃ自分が向いているかどうかかわからない
- 2 -
 - ・自分には向かない
- 1 -
 - ・就職がきまっちゃったから
 - ・他に夢があるから
 - ・教師という職業はすばらしいと思うけど、自分にとってそれ以上に魅力的な職業があるから
 - ・教壇に立つには自分はあまりにも未熟すぎる

資料 1 2

その他、何かあれば自由に書いて下さい。

- <実習前>
 - ・指導案なしの授業がしてみたい
 - ・生徒と話してもいいことにしてほしい
- <実習後>
 - ・実習を通して、人間らしくなれた気がした
 - ・大変でしたが、いい経験になりました
 - ・理想の教師像、理想の授業にいろんな相違があったが、いろんな考え方があったのだと実感した。自分も最良かつ自分らしきのある教師像を作り、目指し、そうなりたいと思う
 - ・友人・生徒の協力があって、自分の能力・心の弱さに気付けた
 - ・よく生徒から教えられると言いますが、生徒の反応に喜んだり、いらだったりして、自分の姿をかえりみたような気がします
 - ・人生を濃縮して味わったような気がした。時がたつのが早かった。こんなに時間がおしかつたのは初めてだ
 - ・倒立、後転、開脚跳びなどがこの2週間で出来るようになりました

<参考文献>

- 1) 池田秀男ほか
 学生から見た教育実習の現状と問題点
 -教育実習に関する調査研究報告書-
 第1号～第5号, 1978, 1～1978, 3.
- 2) 中教審第1次・第2次答申, 1996
- 3) 教育職員養成審議会第1次答申
 ・新たな時代に向けた教員養成の改善方策について-
 1997
- 4) 蓮見音彦ほか
 教育大学・教育学部学生の教職への意識と意見
 中間報告, 1993, 11